

## ニュース

## ソノラ砂漠の地衣類調査（2）（柏谷 博之）

Hiroyuki KASHIWADANI: Lichenological Trip to the Sonoran Desert, Mexico (2)

## カリフォルニア半島へ

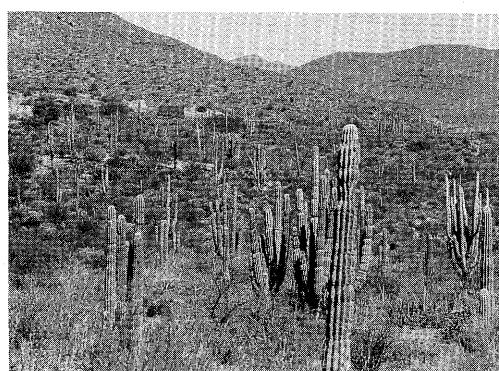
27日 Mazatlan 着。トム一家とメキシコシティーから来た Maria はここから一足先に空路帰宅するので空港まで送る。我々はフェリーでカリフォルニア湾を横断して Baja California Sur 州の La Paz に向かう。フェリーは 3000 トン程の大型船で夕方 6 時の出航で 16 時間の船旅ということだ。旅客用の切符は 4 ランクあり我々は Salon クラスという一番安い指定座席を一人 17 \$ で買った。食料、ビール等は船内で買うと高いので Mazatlan の市場で十分に買い込んできた。同行の連中はこのあたりの情報を詳しいので便利だ。夕暮までの間、遠ざかる美しい町並みを眺めながらビールを飲んで歓談し、低いうねりの中を静かに進む船旅はなかなかのものであった。座席は全て椅子席でゆったりとしているが固定式だった。寝るのには向きなので夜は持ち込んだシュラフを床にひいて寝ることにする。自分としてはシャワー付きの個室にゆっくりと眠りたいと思ったが同行の仲間は、“空いているのにわざわざ高い部屋に泊まる必要ない” と言うので彼らの意向に従った。テントの中に泊まることを思えば気楽なものだが枕元を旅客が歩き回るのでとても熟睡はできなかった。

29日午前 9 時に La Paz から 10 km 程南にある Pichilingue 港に上陸する。船から見える陸地一帯は赤茶けた岩山で 3-7 m の高さに伸びた巨大なフォーク状のハシラサボテン (*Pachycereus pringlei*) が林立しアガベ (*Agave*) の黄色い花とユッカ (*Yucca*) の白い花の対比が美しい。ずっと後方の 2000m 級の山並までこの赤茶けた色は続く。いわゆる緑の森林は全く見あたらず、砂漠に岩がごろごろする自然が作り出す特殊な風景こそ自分が見たかった光景である。さて、どんな地衣類が採集できるかわくわくしてくる。

船倉から Janet の運転で出てきた自動車に乗り込んでいざ出発となった。港の出口にはゲートがあり乗用車用とトラック用に分かれている。係員

の指示で我々のバンはトレーラーの後ろに並ばされた。乗用車はどれもすいすいと出て行くがトラックは警察と港湾係官による荷物のチェックが厳しい。私はスペイン語がわからないがビルの説明ではどうも麻薬の持ち込みをしていないかどうかを調べているらしい。ドアにはアリゾナ州立大学の公用車であることを示す大きなマークが印刷されているのだが行く先や宿泊先を細かくチェックされた。採集した地衣標本のダンボールもいくつか開けるように要求され、用途を執ように聞いてくる。今晚はどこのホテルに泊まるのかとも聞かれたがなにせ、毎日テント生活であるので答えようがない。運転していた Janet が正直にも「どこかそこいらで野宿」などと答えたものだから、なおさら係官の心証を悪くしたようだ。トムが必要になるかも知れないと言って用意してくれた“この一行はソノラ砂漠の地衣類合同調査隊で研究のために旅行中”との証明書? を見せてやっと無罪放免となった。この間 2 時間のロスでいぶんいらいらさせられた。

さて、我々がこれから縦断しようとしているカリフォルニア半島は 1300km 近い長さを持ち、竜が頭を下げたようなかっこうをしている。この半島は丁度中程北緯 28 度付近（サンタ・ロサリアの北）で Baja California Norte と Baja California

図4. *Pachycereus pringlei* の林、ロレト。

Sur の二州に分かれておりその大部分はソノラ砂漠に含まれる (図 1)。今回の調査は半島を縦断して走る国道 1 号線沿いに北上しキャンプを続けながら調査をすることになっている。

La Paz は半島の先端近く、北緯 24 度に位置し北回帰線も近い。この町には蒸留水を作っている工場があり、不足気味の飲料水を 20 l 入りのタンク 5 本を購入した。一本 15 \$ は他の物価に比べるとかなり高いが独占企業相手では値切る訳にもいかない。La Paz からいったん南下し Laguna 山系 (Sierra la Laguna) に近い北回帰線上の村 Todos Santos に向かう。Todos Santos 付近は降雨量が多く町とはいえ信号が 1 つしかない静かな所で中心地から 15 分ほど西に走ると海につきだした露岩がある。急峻な滑りやすい小道を登り詰めると石の上に *Lecanora* や *Pertusaria* 等の固着地衣に混じって *Niebula* とカラタチゴケ属の美しい群落が現れた。*Fouquieria* やハシラサボテン (*Pachycereus*) の幹からはリトマスゴケ (*Roccella*) が 20 cm ほどの長さにぶら下がり *Dendrographa* が球形のコロニーを作っている。ゆっくりと採集し太陽が西に傾く頃今日の寝床を探して北上する。La Paz から北に 50 km 程走り、国道から 5 km 程灌木を分け入ったサボテンと Adam's Tree (*Fouquieria diguetii*) の林の中が今日のキャンプ場となつた。自動車のエンジンを切ると全く静かでサヤエンドウに良く似たアカシアの実がかさかさ鳴る音と小鳥のさえずりがたまに聞こえるだけだ。サボテンの種類は多く、中でも現地でカルドン (Cardon) と呼ばれている *Pachycereus pringlei* は最も普通にみられる (図 4)。大きいものでは高さ 7-8 m、直径 40 cm 程もある。これにまじって Organ Pipe Cactus (*Lemaireocereus thurberi*) や先端にあご鬚のような刺を持った Old Man Cactus (*Lophocereus schottii*) も散見される。ピンクや黄色の花をつけたウチワサボテンも多い。

地面は多少泥の混じった砂地である。海拔は 2-3 m でほとんど平坦である。所々に水の流れた跡が残っているし、氾濫原に特徴的に生えるキク科の *Baccharis sarathroides* が散見されることから考えるとこのあたりは時には大規模な洪水が発生して冠水することもあるようだ。しかし、灌木上



図5. 灌木の枝には *Niebula*, *Ramalina*, *Xanthoria* がびっしりと生えている、ラパス郊外。

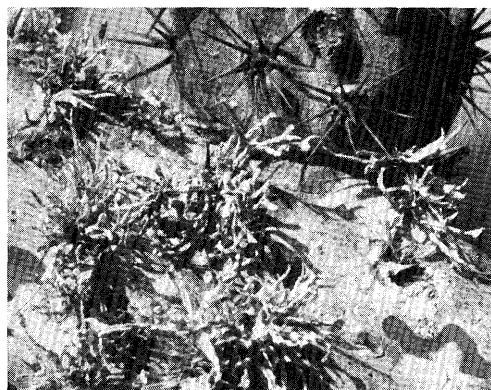


図6. ハシラサボテンの刺の根もとには色々な地衣類が着く、サンタロサリア。

の地衣群落は壯観で数種の *Niebula* 属とカラタチゴケ属が木の肌が見えないほどびっしりと生えている (図 5)。また、これらに混じってムカデゴケ属、テロキステス属 *Teloschistes*、ゲジゲジゴケ属 *Anaptychia* も散見される。地衣類は乾燥に強い生物であるが極度な乾燥気候が続くこの付近で生活に必要な水分をどのようにして得ているのか不思議である。やや古くなったサボテンにはムカデゴケ属やオオロウソクゴケ *Xanthoria* が橙色の花をちりばめたように文字どおり鈴なりになっている。地衣類はサボテンの刺の根もとを取り囲むように地衣体がつく場合が多い (図 6)。空中湿度の低いこのあたりでは適度な湿度を保ち、昆虫や鳥の捕食から身を守るためにこのような場所

を生育場所に選ぶことは生きていく上で有利なのだろう。

30日も大快晴。国道一号線を北上して Constitucion で左折し砂利道にはいる。目指すは Magdalena 島 (Isla Magdalena) への渡船場があるという Can Cun である。目につく植物はいたって単純で、ハシラサボテン、アカシア、ユッカが優先し、幹も葉も濃い緑色をした *Cercidium* は灰褐色の砂地と鮮やかな対比をなす。平原はゆったりとした起伏を繰り返しながら延々と続き、道は数キロを単位にまっすぐにつけられている。民家は全く見かけない。窓は閉め切ってはいるが、どこから砂ぼこりが入り込んで、なにもかも真っ白である。時々車を止めて地衣類を観察する。灌木に着く地衣類は大部分がカラタチゴケ属、*Niebula* 属、リトマスゴケ属などの樹枝状地衣類で特に *Niebula* 数種類が入り乱れて灌木の細い枝先まで寸分の余地もなく生えている。地衣類の種類は単純だがその生育量は大変豊富である。エキシカータ用に手あたり次第に採集する。心配していたガラガラヘビの姿は一度も見ないし、ここ数日サソリも見かけない。照りつける日差しは強いがゆったりとした気分で観察と採集を楽しんだ。

Can Cun は民家が3軒とメキシコ海軍の小さい無線基地があるだけだ。狭い内海を隔てて目指す Margarita 島までせいぜい数キロである。早速船の持ち主を見つけて渡船料の交渉に入る。スペインから来たマリアが交渉役を買って出たが値段の折り合いがつかない。どうしても島に渡りたい我々の足元を見られたらしく 200 \$ からびた一文まけられないという。このあたりの漁民一人あたりの日当は 15 \$ くらいだそうだから、べらぼうな値段であるが、なにしろ船は一隻しかなくここまで来て引き返す訳には行かないで向こうの言うままの値段で船を一日チャーターすることにした。

地図を見せて我々が上陸したい場所を示すと、シーシー（わかった、わかった）とご機嫌である。ヤマハの船外機をつけたプラスチックボートは先を高く浮かせながら猛烈なスピードで走るので全員びしょぬれとなった。足元が冷たくなったのでふと見ると、船底の亀裂から水がジョボジョボと

入ってくる。びっくりしてシーシーの親父の顔を見るとそこの空き缶で水をかい出せと身ぶりで示す。なるほどビニールをとおした缶ビールの空き缶が2つころがっており、ビルと私は船が対岸に着くまでの30分あまり排水係りとなってしまった。手を休めて Can Cun の方を振り返ると海岸沿いに発達したマングローブの緑が茶色い砂漠と青く晴れ上がった空と美しい対象をなして横たわっていた。Can Cun を出て中海を半分ほど渡った頃どうも舟の向かっている方向が我々の指示した場所と違うことに気がついた。マリアはさかんに方向が違うと抗議したが、例によってシー、シーを連発するだけで舟はどんどん北の方へ進んでいく。後でわかったことだが、我々の目指した地域は軍の施設があり、一般人は立入禁止ということらしい。約40分で Margarita 島の漁港に無事到着した。100軒程の民家があり、小さな造船所や工場跡もあり、昔はかなり沢山の人々が生活していたことがわかる。村の顔役に挨拶をしてから島の最高峰（約300 m）を目指す。ヘビに気をつけるようにと注意されたので細い踏みあと道を慎重にたどる。島全体は露岩が出ており、ハシラサボテンの仲間で横にくねくねと這う *Machaerocereus* とキク科の *Artemisia* が散生しほんぱつんと *Bursera* があるくらいである。乾燥し過ぎのせいか地衣類も少ないが、この島からしか見つかっていない *Ramalina wigginsii* が岩の上にきれいな群落を作っている。また、日本ではおめにかかる *Rainkella* 属がかなり目につく。4時間の採集の後同じボートで Can Cun へ戻り、また延々と砂漠の砂利道を走って出発地の Constitucion へ帰り着いたのは午後8時をまわっていた。暑さのせいかみんなとても疲れたようだ。私はテントの設営もじゃま臭くなつたのでみんなに断つてこの日は車中泊を決め込んで早めに眠りに着いた。

31日、快晴。Constitucion から国道1号線を Magdalena 山脈沿いに北上する。カリフォルニア半島の東半分には海拔 600 m 以上の脊梁山脈が続き、この山脈の東側すなわちカリフォルニア湾に面した一帯は西半分よりもさらに乾燥している。国道1号線はこの脊梁山脈を縫うようにして走っ

ている。西斜面には *Acarospora*, *Niebla*, *Tephromela* 等が岩上に多いが、山脈の東側斜面では乾燥に強いと言われる地衣類もほとんどその姿を見ることはできない。わずかに、岩肌に固着地衣の *Caloplaca* や *Acarospora* の黄色っぽい地衣体が見かけられるだけだ。地衣は少なかったが太ったツノトカゲをよく見かけた。ツノトカゲは頭に 1 cm ほどのツノが 3 本はえており、体長 15 cm ほどで恐ろしい顔に似合はずおとなしい。道路は対面交通でカーブが多くどの車も 120 km ほどのスピードを出しているのでかなり危険だ。Janet も速度自動コントロール機を 120 km にセットして運転を楽しんでいるが、せめて 80 km/h ほどのゆったりしたスピードで走って欲しいと思う。曲がり角には決まって赤茶けた自動車の残がいが放置してある。町中から遠く離れているせいか事故をおこした車の回収はしないようだ。この日は古い保養地 Loreto のオートキャンプ場でのキャンプとなった。海に面した砂浜にはヤシが植えられており、シャワー、コインランドリーもある。設備の整ったキャンピングカーなら施設されたコンセントからも電気も供給してもらえるが我々の自動車には無論そんなものはない。食事は町のレストランでとることに決め水浴をかねてキャンプ場前の海で少し泳ぐ。

6月1日、快晴。Loreto を出発してカリフォルニア湾岸に沿って北進する。ハシラサボテンの林の向こうに見える内海は絵のように美しいが、植生は単純で地衣類もほとんど見られないので、もっぱらドライブを楽しむ。女性連中は所々にあるビーチで車を止めては水着に着替えてはしゃいでいる。昼過ぎに古い町 Santa Rosalia に入り中央公園で車を止めてパンとチーズの昼食。Santa Rosalia を出るとメキシコハイウェイ 1号線は山間をぬって伸び、やがて右手に美しい山容を持つ活火山 Volcan Las Virgenes と El Azufre の山裾にさしかかる。この山を越えると広い台地に出た。ビスカイノ砂漠 Desierto de Vizcaino と呼ばれるこの一帯は林立する巨大なハシラサボテンの林をぬけて再び半島を東から西に横断する。

1日は海岸の町 Guerrero Negro の Recreation Vehicles (RV) 泊。RV はキャンピングカーで旅

行する人達のための宿泊施設でシャワー付きの個室、レストラン、テント場などを持ったモーテルである。我々はシャワーだけを使わせてもらうことにして裏庭にあるテント場にテントを張った。夕方になると風が強くカリフォルニア海流（寒流）の影響を強く受けてセーターが必要なほど寒い。ここでは町の西 150 km にある Cedros 島へ飛行機で出かけて調査を行う予定である。飛行機の予約はどこの店でやっているかと宿の主人に聞くと、明日飛行場で買えば良い、今は混んでいないはずだと請け負ってくれた。

次の日早めに朝食を済ませ、切符の予約をしようと飛行場にでかけた。飛行場とは言え管制塔兼切符売り場があるだけで実に閑散としている。建物の横にはエンジンのない旧式の飛行機が 2 機置いてある。待つこと 1 時間、自転車でやってきた職員に聞くと 2 週間先まで満席であるとのことで島の調査はあきらめることにした。島には鉱山がありそこで働く人達で 30 人乗りの旧式プロペラ機はいつも込み合っているということだった。相談の上、Cedros 島と植生が似ているという Eugenia 岬まで Vizcaino 砂漠をつききって行くことにした。午前 9 時、ガソリンを満タンにし市場で食料を買い足して出発した。目的地まで約 230 km の予定である。町を出るとすぐに舗装道路は切れ巨大な（高さ 30-50 cm）アッケシソウが目立つ。道は吹きだした塩で真っ白である。町から 100 km ほど走ったところで、突然自動車のメーター類が全て切れてしまった。幸いヘッドライトだけはつくようであるが距離計、ガソリンゲージ、冷却水の温度計など全て動かなくなってしまった。ヒューズが飛んだと思われたので予備のものを探し出してとりつけたがイグニッションキーを ON にしたとたんにまたしてもぱちんと音がして切れてしまった。どこかでショートをしているらしいが、原因はわからない。走行には一応支障がないように思われたが距離計とガソリンゲージが動かないのは砂漠では危険である。みんなの意見を総合するとやはりここから引き返すのが得策ということになり来た道をとことと帰ることになった。みんな張り切っていただけに帰りの車の中では元気がなかった。夕方町に帰り着き町の修理工場で

チェックを依頼したら3時間もあちこちいじくり回したあげく、とうとう故障箇所は発見できなかつた。この先 Phoenex に帰り着くまで 1500 km 余りを残すというのにメーターの切れた自動車の運転を強いられるのは極めてつらい。日本車ならこんな故障はおこらんのじゃないかと同乗者がなげくことしきり。

自動車の修理はあきらめ、Guebro Negro の町を後に北上する。町を出るとすぐに州境がありここから北は Baja California Norte 州となる。北緯 28 度あたりを境に州名も変わり時刻も山岳時間帯から太平洋時間帯へかわり 1 時間時計を遅らせる。北約 50 km で国道 1 号線を左折し、海岸にある Santo Domingo という寒村近くに野営することにする。干し魚の臭いが強烈で近くに魚の加工場があるらしいがうす暗くて見えない。テントを張っていたら初老の紳士がやってきて、このあたりは潮の干満が激しいのでテントはなるべく高いところに張るようにと注意してくれた。暗くて良くわからないが注意してみるとなるほど打ち上げられた海藻があちこちある。この日は柔らかい砂丘の上で寝ようと思っていたが、彼の忠告を入れてちょっと小高くなった *Euphorbia* の灌木の間にテントを張ることにした。風は強いが夜の星空はすばらしかつた。

翌朝はうす曇りながら風もなく朝から良い天気になった。昨夜は夢うつつに水の音を聞いたように思つたら潮はテントのすぐわきまで上げてきていたことが解つた。親切な叔父さんの忠告がなかつたら全員ずぶぬれになつていたと思う。昨夜は暗くて良くわからなかつたがキャンプの北 200 m 程の所に岩場があり、地衣類の採集には絶好と思われた。採集の準備をしていると昨日の紳士がやってきてこの付近はガラガラヘビが多いので注意するようにと声をかけてくれた。特に我々がめざしている岩場のヘビは栄養がよいので図体がデカイよといつ。灌木を藪漕ぎして目的地を目指すことにしていたが、「それだけは絶対に辞めなさい」と忠告されたので海岸沿いに岩場まで行き、そこから 30 m ほどの崖をよじ登ることにした。玄武岩の岩場に近づくと岩の垂直面には 30 cm 以上に成長したリトマスゴケがびっしりと生え、

頂上部の石の上には *Niebula josecuervoi* がスルメの足を立てるように生えている。また灌木にはリトマスゴケに近縁の *Dendrographa* が直径 20–30 cm 程の丸いコロニーを作つていていた。ガラガラヘビのことはいつも頭から離れなかつたが、ハンマーとタガネでカンカンと音を立てながら固着地衣を採集するのはヘビよけには効果的だ。今からここを通るからヘビのみなさんどいて下さいといふ訳だ。なんとなく腰が引けるような岩登りを終えて岩場の頂きに達するとそこは開けた平地で *Euphorbia*, *Fouquieria diguetii*, *Jatropha*, *Yucca* が高さ 1–3 m の疎林を作つてゐる。*Fouquieria* の枝先には *Trichoramalina crinita* (tricho=毛のある; *Ramalina* カラタチゴケ属) が *Niebula* 属やカラタチゴケ属に混じつて生えている。学名でもわかるように地衣体の縁から黒色のシリアを出す珍しい種類(図7)で、以前は狭義のカラタチゴケ属として扱われていたこともあるが特有の地衣体内部組織や地理分布を持つので現在は独立した分類群として扱われている。珍種の採集に気を取られ

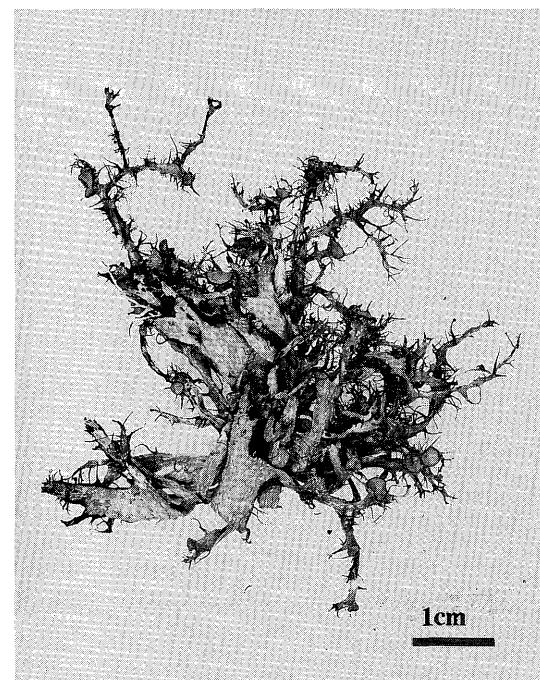


図7. *Trichoramalina crinita*.

てヘビのことを忘れていたが、右手の *Fouquieria* の根元近くに浅い皿状の窪みを作つてガラガラヘビが直径 25 cm ほどのとぐろを巻いているのを見つめた。日本で見るヘビは大抵木に登つたり草むらに長く伸びて舌をペろべろ出しているのを想像するが、こちらのは丸まって頭だけこちらを向けている。足元からほんの 2 cm の所に 1 匹、そこから 4-5 m 離れた所にもう 1 匹いる。あわてて近くで採集している連中に足元に注意するよう大声を出したが、それまでは採集に気が入つて誰もヘビの存在を忘れていたようだ。地面の小石や落ち葉と保護色になって知らないで見過ごしていたのだろう。この時は合計 8 匹いるのを確認したが、どれも枝振りのよい大きな灌木の下だった。2 m 程に近づくとチ、チ、チとするどいの音を出しが、離れていると頭をこちらに向けるだけで舌をペろべろだしている。一度彼らの居住まいがわかつてしまうと、あちこちにいることがわかつて、急に採集意欲がなくなってしまった。後で地元の人に聞いたら、ガラガラヘビは砂漠の中よりも人家の近くの灌木に多いということであった。特にこの付近では加工しきれない魚を野原に捨てるため、ヘビの主食であるネズミが沢山繁殖して近年ガラガラヘビの数も増えているとのことだ。なるほどこのガラガラヘビは胴体の太いところが径 7-8 cm ほどもありどれも丸まるとよく太っていた。



図8. ソノラ砂漠には *Yucca*, *Idria columnaris*, *Jatropha* のような変わった形の木が多い、ロサリオ南西 10 km.

Guerero Negro の町からほぼ真北に北上する国道 1 号線は Punta Pierta の村を過ぎたあたりで半島中央部を細長くカバーする国立公園 (Parque Natural del Desierto Central de Baja California) にぶつかる。道は高度は 150-500 m の低い尾根を縫うように走るがこの付近には Cirio (スペイン語で教会の大きなローソクを意味する) という名で知られている固有種の *Idria columnaris* がアガベやハシラサボテンに混じって特有の樹形を見せる (図 8, 9)。勿論本物を見るのは始めてではあるが、誰でもこの木を一度見るとその特異な形は忘れる事はないだろう。高さ 1 m 位までの幼木はゴボウをさかさにしたような形をしており、成長したものは高さ 15 m、直径 50 cm ほどで先にいくに従つて徐々に細くなり、頂部で径 10 cm ほどの枝が数本冠状に突き出している。樹皮は茶褐色で一面に褐色の割り箸ほどのトゲを持った小枝が生えている。Cirio は乾期になるとすぐに葉を全部落とし樹皮表面に特殊な樹脂層を作つて乾燥から身を守ると共に休眠状態に入ると言われている。この時季には葉はほとんど落ちており、茶色に変色したものが散見されるに過ぎない。

不思議なことには Cirio にはこの付近に多いヤドリギやネナシカズラの寄生植物は全く着生していない。しかしげジゲジゴケ属 (*Anaptychia*), ムカデゴケ属 (*Phaeophyscia*), サビイボゴケ属 (*Xanthoria*) やカラタチゴケ属地衣類はけっこう着生している。中でも巻き付くようにぶら下がっ

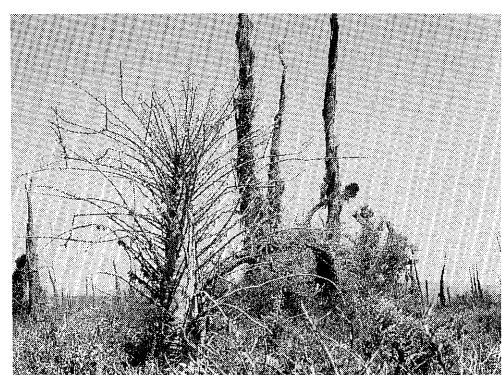


図9. *Idria columnaris* の幼樹 (手前) と成木、ロサリオ南西 10 km.

ている1-2 mほどに伸びたカラタチゴケ属の *Ramalina reticulata* は離れてみると日本の針葉樹林帯でよく見かけるサルオガセに似ているがこの樹枝状地衣は地衣体が偏平できれいな網目模様を呈している。この網目の粗密度は空中湿度と密接に関連し、乾燥した立地に生育するものは網目が細かく緻密となり逆に湿度が高いところでは荒く太くなることがわかっている。 *Cirio* の生育地域はカリフォルニア海流の影響で霧の発生しやすい場所に一致すると言われているが、 *R. reticulata* もこのような立地を好んで生育するようである。

6月4日。昨日は牧場の中で一泊した。北緯30度に位置する港町 El Rosario でると異様な樹形で目を楽しませてくれた *Cirio* の分布域も外れた。海岸では濃い霧となりハシラサボテンに代わって黄色い花を満開にしたアガベ *Agave* と *Enselia*, *Ambrosia*, *Haplopappus*, *Helianthus* などのキク科植物が急に目立つようになった。気温が急に下がったのであわててキルティングをはおる。この日は最後のキャンプで海岸の活火山の麓にテントを張った。前方には葉を落とした *Euphorbia* の背の低い植生と美しい San Quintin 湾が広がり裏手は赤茶けた火山れきの斜面になっている。テントを張り終えてひと休みしていると小用から帰ってきたマリアが“ここは Fauna がとても豊富だ”とウインクしながら言う。何のことかとたずねたら「ヘビにムカデ、トカゲ、サソリにクモなんでもござれ、皆さん注意しましょう」と陽気な答が帰ってきた。気温も下がったことだし、夜は久しぶりにゆっくりと眠れと思っていたらもう一晩緊張することになった。その後みんなで手分けして有り難くない動物の潜んでいそうなテントの回りの *Ambrosia* を引き抜いて自衛した。

翌朝、溶岩のごろごろする海岸へ採集に出た。海岸の岩はどれも *Niebla* と *Xanthoparmelia* が隙間なく生えているので岩そのものがどれも黄色く見える。岩がオーバーハングしているやや日陰に

は *Reinkiella*, *Roccella* などの珍品も多い。種類数はそれほど多くないが採集袋は数分でいっぱいになる。最後の採取地としては有り難い場所だ。

この日はメキシコ最後の夜。国境に近い Ensenada のモーテルに宿泊する。久しぶりにゆっくりとシャワーを使い衣類を洗濯した後、自動車を洗車場へ持って行った。ここには“プロ”的洗車係が二人いてドラムカンに溜めた水を大きな空き缶でばさばさとぶっかけ、泥をきれいに落してくれた。最後は古新聞で水気を拭き取ると見違えるようにきれいな車になった。明日は標本を満載したまま税関を通過しなければならない。係官の心証を悪くすると積み荷のチェックが厳しくなる心配があるからである。

6月7日。Tijuana 経由でアメリカへ再入国。La Paz でのトラブルに懲りて少し緊張したが、全員のパスポートにざっと目を通しただけですんなりとゲートを通してくれた。アメリカに入ると道も広くゆったりとしたドライブが可能であるが、自動車は砂漠でのトラブル以来メーター類がだめな上、ショックアブソーバーもこわれたらしい。この日はハイウェイを終日時速 60 km でのろのろドライブを続けること 16 時間、やっとなつかしのフェニックスにたどりついた。

旅行期間中は、毎日平均 300 km 以上のドライブを続けながら採集地を回り、土曜、日曜休みもとらなかった。それぞれが“外国人”には弱みを見せたくない必要以上に頑張っていたような気もする。悪名高いガラガラヘビやサソリもよく出没した。慣れるまでは、夜中に小用でテントを出るのはいやだったが、頭上を一晩かけてぐるりと移動するサソリ座は圧巻であった。この旅行は身体の芯から疲れたが、珍しい地衣類やその他の動植物にもお目にかかれた。サボテンのとげの根元に群落を作るアカサビゴケは色彩に乏しい砂漠では花のように美しい。終わってみれば苦労の多い旅も楽しい思い出だけが残った。